



TITLE:

<特別講演>アルベール・カミュとともに

AUTHOR(S):

三野, 博司

CITATION:

三野, 博司. <特別講演>アルベール・カミュとともに. 仏文研究 2015, 46: 193-204

ISSUE DATE:

2015-10-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/201868>

RIGHT:

許諾条件により本文は2016-11-01に公開

アルベール・カミュとともに

三野 博司

特別講演の依頼を受けたとき、3月7日奈良女子大学で行った最終講義と同じ内容であればお引き受けしますと答えました。講義のほうは一般向けに、自分の歩んできた研究を振り返るというものでした。原稿は用意せず、パワーポイントを使用し、写真や自分のスケッチを交えて、自著のまえがきやあとがき、カミュについて書いた雑文を引用して、気楽に聞いてもらえるようなスタイルでしゃべりました。今回は専門家の前で話すのだからもう少しアカデミックな水準に引き上げようかとも思ったのですが、結局は90分の話をも60分に縮約するだけになりました。最終講義のときは活字に残すことはまったく考えていませんでしたが、6月13日の京大での特別講演を経て、このような伝統ある研究誌の片隅に場所を与えていただくこととなりました。厚くお礼申し上げます。なお、この機会に初めて文章化しましたが、講演のときの口調を残すとともに、内容の付加および整理を行いました。

＊

第1章 青春の土地——ティパサ

ごらんのように「アルベール・カミュとともに」と表題をつけました。掲げたのはもちろんカミュの写真ですが、ときどき私がカミュに似ていると言う人がいます。奈良女子大学での最終講義のあと、退職祝賀パーティを開催していただきました。そのときの引き出物として、卒業生たちが特注のチョコレート菓子を準備してくれました。私の研究室の書棚を埋め尽くしていた抹茶菓子のコレクションを充分承知している卒業生なので、もちろん抹茶味のチョコレートでパッケージは緑色ですが、そこには私とカミュの顔写真が並んで印刷されています。出席者のひとりである奈良女子大学の学長さんがそれを家に持ち帰ると、娘さんが二つ並んだ写真を見くらべて、「どっちがカミュ？」とたずねられたそうです。似てしまうくらい長年つきあっているということでもあります。これまで、フランス語の教科書や文法参考書を執筆し、文学批評の本を編集し、日仏文化交流の論文を書き、『星の王子さま』関連の本を出したりと、雑多なことばかりしてきましたが、研究の中心は、30年前に研究会を立ち上げたアルベール・カミュです。

カミュと出会った頃、とりわけ初期作品に横溢している地中海の陽光に魅せられました。彼が

25歳のときアルジェのシャルロ書店から刊行した第二エッセイ集『結婚』は、彼の作品のなかでももっともまばゆい光を放っています。とりわけ冒頭に置かれた「ティバサでの結婚」は、カミュにとっての聖地ともなった海辺の廃墟で繰り上げられる自然との婚礼をうたっています。「青春の土地——ティバサ」と題した文章を、2010年『流域』（青山社）第66号に発表しました。そこから引用します。

書物によって懐胎し生まれた「青春の土地」というものがあるとすれば、ティバサこそは私にとってそのような紙上のトポスであり、身近な現実世界にはどこにも存在しない場所であった。[……]「春、ティバサには神々が住まう」と始まるエッセイに謳われた土地が、地中海に臨んだアルジェリアに実際に存在するとはいえ、長い間、その土地を訪れようなどという考えはついで私の頭に浮かんだことはなかった。ティバサは書物の中に、地中海の陽光のもとでくっきりとその輪郭を描き出して、不壊の姿のまま生き続けていたからだ。私にはカミュのテキストだけで充分だった。

その間に、1990年代に入って、アルジェリアは渡航に危険な土地となってしまう、現実のティバサはますます遠のいて、同時に私の関心も地中海の陽光からは少しずつ離れていくようになった。

青春の土地の霊力が衰えて何年かが過ぎた頃、ようやく私はアルジェリアを訪れてみようという気持ちになった。テキストの中のティバサと現実のティバサとの間に横たわる越えられない隔たりに対して、平静に対処できると思われた。

これは2007年春のことでしたが、旅程を立てて、パリ＝アルジェ間の飛行機の予約も済ませた直後に、アルジェの市中で首相府などを狙ったテロが起り、30名の死者を出すという事件が起りました。すぐに私は予約をキャンセルしました。

2009年の秋になって、ようやくアルジェリアへ旅する機会が訪れました。テロの危険はかなり減じたとはいっても、スリやひったくりなどの軽犯罪は非常に多いとの情報が伝わってきました。日本語の旅行ガイドブックは久しく絶版となっているので、フランス語版を2冊、英語からフランス語に訳されたものを1冊読んでみました。その中には、用心のために現地人に案内してもらったほうが良いと書かれていた本もありました。そうしたところへ、幸いなことに縁があって、フランス人の友人から、バルベル人でアルジェに生まれ育った精神科医を紹介してもらうことになりました。敬虔なイスラム教徒であるこの人の現地案内によって、2009年に初めてアルジェリアを訪れ、ティバサとその青い海を見ることができました。ティバサで撮った写真、およびそれを元にして描いたデッサンをご紹介します。

第2章 石化と沈黙

28歳のとき、大阪市立大学文学部仏文科の助手に採用されました。これは任期付きではなく、論文さえきちんと書いていれば、昇進して定年まで勤めることができる職でした。今日、フランスで博士号を取得して帰国した優秀な若い人たちでさえ容易にポストを得られない厳しい状況を考えると、隔世の感があります。助手になったとき、私の業績としては修士論文しかなかったわけですから。

助手になってすぐの5月に、修士論文に手を加えて日本フランス語フランス文学会の大会で研究発表を行いました。そして学会誌（第35号）に掲載されたのが「石化の思想——カミュにおける石のイメージ」です。私のデビュー作というわけですが、バシュラール流のイメージ分析を基にしています。カミュのすべての作品から石の主題を拾いあげましたが、当時は石のことばかり考えていました。新聞を読んでも「石」の文字があるとすぐそこへ目が行きます。それが、よく見ると石原慎太郎だったりするわけです。この論文では、カミュにおける石化、つまり石と一体化したいという願望を明らかにしようと試みました。石化は、当時の私にとっての大きな関心事でもありました。私は京都に生まれ育ちましたが、京都には禅寺がたくさんあります。学生時代および大学院生時代に禅に関心を持って、禅寺で開催される参禅会に参加していました。私にとって、座禅とは石化でした。不動、沈黙、無念無想、その絶対のゼロに至ったところから創造的な力がわき起こると考えていました。

助手になってから1年半後、大阪市から給料をもらいながら、2年間フランスへの出張を許可されるというたいへん恵まれた機会を与えられました。1980年の秋から82年の春まで、クレルモン＝フェラン大学でポール・ヴィアラネー先生の指導を受けました。このことについては、私が会長を務める奈良日仏協会の機関誌「Mon Nara」創立20周年記念特別号（2014年7月）の「私とフランス」欄に書きましたので、そこから引用します。

ヴィアラネー先生は、当時からフランス19世紀の歴史家であるミシュレ研究の第一人者であり、全集の校訂・編集をされていましたが、同時に私の研究分野であるカミュに関する著作も発表されていました。たまたま間接的な情報で、ヴィアラネー先生がクレルモン＝フェラン大学におられることを知り、大学宛に手紙を書き、フランス語で書いた論文を添えました。先生の指導の下で、博士論文準備のための勉強をしたいという内容です。紹介者もなく、いきなり投じた手紙に返事がもらえるものだろうか……。心配は無用でした。間を置かずして、とても好意的な返信が送られてきました。その手紙を宝物のように携えて、1980年10月、クレルモン＝フェランへ行き、先生の研究室の扉を叩きました。

私自身が自分でも気づいていなかった力を先生は引き出してくださった、と今でも思います。優れた指導者である先生にとっては、当然のことだったのかもしれませんが、私には、遠方からやってきた異国の留学生に、これほどの懇切な指導と助力を惜しまない先生

の姿勢が不思議なものにも感じられました。

論文執筆半ばで帰国後、引き続き郵便によるヴィアラネー先生の指導を受けて博士論文を完成し、1985年3月に渡仏し論文審査を受けました。その後、先生は早めに大学を退職されて、活動の場をパリに移されました。パリの書斎の書架には、先生自身が編集されたミシュレの全集が並んでいます。先生には毎年新年カードを送っていますが、それに私がフランス各地を描いたデッサンを添えました。そのつたない絵を先生はいつも喜んでくださって、それがミシュレの豪華本と並べて麗々しく書架に展示されているのを見たときは恐縮しました。

2013年8月、カミュ生誕100年を記念する学会がスリジーで開催され、世界中から60名のカミュ研究者が集まり、一週間寝食を共にしました。80歳を越えるヴィアラネー先生も参加され、たいへんお元気でした。最終日には、シンポジウム「日本とカミュ、カミュと日本」が開催され、私を含む4人が壇上で報告を行いました。そのあとのディスカッションのときに、聴衆席の最前列におられた先生は突然立ち上がって、私との出会いの昔話を始められました。そして、話がさらに脱線し、私のデッサンを先生が書架に飾っておられることにまで発展して……、会場が笑いに包まれたのは、先生がこう言われたときです。「私の家には三野美術館があります」

博士論文に話を戻しますが、論文のテーマを決めるときは、「石化」をさらに発展させたものと考えました。そして選んだのが「沈黙」です。先生の指導の下で書き上げた博士論文 *Le Silence dans l'œuvre d'Albert Camus* は、1987年パリのジョゼ・コルチ書店から出版されました。ずっとのちになって、2003年、新たに一章を加えて日本語訳『カミュ 沈黙の誘惑』（彩流社）を刊行しました。その冒頭を引用します。

ジャン＝ポール・サルトルは、書物にかこまれて人生を始め、書物のなかに世界を発見した。[……] これとは反対に、カミュを世界の秘密の発見へと導いたのは、本ではなくて、自然の沈黙であり自然の教訓であった。書物のなかに書かれた世界は、貧民街の子供にとっては近づきがたいものだ。もしカミュが、幼年時代の物語を書いたとしたら、サルトルとは反対に、それに『沈黙』という標題をあたえたかもしれない。

この沈黙、それはまず母親の沈黙であり、つづいて自然の沈黙である。このふたつの沈黙は、一方は個人の歴史の淵源にあり、他方は人類の歴史の起源にあって、ともに原初の沈黙の性格を有している。換言するならば、それは、発話が中断された瞬間に生ずる沈黙ではなく、言葉が発生する以前に無限に広がっている沈黙なのだ。この沈黙は、アルジェの貧民街ベルクールに生きる子供に、あるがままの世界を開示してみせた。それは単純で、深遠で、透明な世界であり、言葉によってなる抽象的な世界とはまったく異なったものなのだ。

この沈黙が、言葉という間接的な手段をもちいずに、事物や人間の世界と直接に交流することを子供に教えたのである。その生涯をつうじて、カミュは、いかなる言葉も、いかなる論理も入りこむことのできない、沈黙にみたされたこの世界に執着しつづけるだろう。

[……] 沈黙は、もしそれが言語活動とつながりをもたなければ何物でもない。作家とは、

まさしく、彼の沈黙がエクリチュールのなかで永遠化される瞬間に生まれるものだ。若き日のカミュが、最初の作品を書こうとしたのも、自分の沈黙に声をあたえるためであった。

フランスで刊行されたとき、ヴィアラネー先生が序文を書いてくださいました。その一部を引用します。引用ばかりですみません。

私は、「親和力」が彼の研究の動機となっていることを見抜いて、信頼して彼を支援した。三野氏は、おそらく、アルベール・カミュの「かたくなな沈黙」をいくらか共有していたのだ。彼は、いずれにせよ、「真の芸術作品は[……]本質的にもっとも少なく語るものであり」、声高に叫ぶかわりに人にそっと耳を傾けさせるものであり、「高い堤防」によってみずからを取り巻くものであるという確信において、カミュとあい通じていたのである。彼は、自分のものである日本の文化のおかげで、かくも慎み深い芸術家と特権的な関係を結ぶことができたのだと、私は思った。

スリジーの学会で私との初めての出会いを語られたヴィアラネー先生は、そのとき私が沈黙していたと言われましたが、それはただ単にフランス語ができなくて、ことばが続かなかっただけのことなのです。ただ、その沈黙が先生の目に極東の国の神秘に映ったとすれば、これは幸運だったといえます。先生に書いていただいた序文は次のように結ばれています。

三野氏の批評の方法それ自身が、私を魅了した。テキストの統一性を明らかにしようとする瞬間に、それを強いるよりはむしろ、その曖昧さを尊重する。勝利を誇り、あるいは勝利の幻想をあたえることを、みずからさし控える。目的物に到達すると思われる瞬間に、それから離れて、別の道をたどってそれにふたたび達しようところみる。すなわち、この方法は、デカルトの「理性の順序」にしたがうのではなく、多様化しつつ重なりあう短い近似法によっている。それが生みだす文体は言葉にたいして極度の敬意をはらっている。

アルベール・カミュのすべての作品をつうじて、弱音でうたわれる沈黙の歌が聞こえてくる。三野氏は、すでにおわかりのように、彼の評論のなかで、この沈黙が静かに鳴りはじめるのに適切な語調をみいだすすべをこころえている。この小さな書物からは、忘れがたい静かな音楽がもれ聞こえてくるのだ。

先生のところに論文の下書きをもっていくと、いつも「フランス人はこういう論文の書き方はしない」と言われました。しかし、私にとって幸いだったのは、先生が「でもこの書き方は魅力的だから、これで続けなさい」と励ましてくださったことだと思います。

第3章 『異邦人』

二年間の出張・留学から帰ってすぐ、1983年初めに日本カミュ研究会を立ち上げました。関西在住の9人で始めたのですが、いまでは全国に40人近い会員を抱えて、フランスにある Société des Études camusiennes と緊密な連携を取って、その日本支部としても活動しています。1994年には、京都で図書出版を行う青山社の協力を得て、日仏語による隔年刊の研究誌『カミュ研究 Études camusiennes』を創刊し、本年5月には第12号を出しました。創刊準備にあたって、当時フランス語入力に優れていたマッキントッシュのパソコンを購入し、編集作業のためにかなり必死で操作練習をしたのがなつかしいです。私たちの研究誌はカミュ研究の分野ではすでに国際的な評価を得ていますが、フランス語の校閲に関しては、私と一緒に編集作業を担当している獨協大学のフィリップ・ヴァネさんの献身的な協力に負っています。この30年間、私のカミュ研究は日本カミュ研究会とともに、またこの20年間は同時に『カミュ研究』とともに歩んできました。

大変お世話になった大阪市立大学を離れて、奈良女子大学へ移ったのは1991年です。奈良に来ませんかと声をかけてもらったとき、人生の後半を奈良の地で過ごすという魅力は抗しがたいものでした。1994年には、世界思想社の「学ぶ人のために」シリーズの一冊として、『文芸批評を学ぶ人のために』という本を共同編集しました。1980年代以降、文学批評方法の本が書店を賑わしていました。私たちの本も発売後数か月間、梅田の紀伊國屋書店に平積みされていました。いまでは考えられないことです。仏文を中心に各分野の人に寄稿してもらい、さまざまな批評方法の紹介を行いました。理論編のあとに実践編があったほうがいいということで、巻末に私の「『異邦人』のさまざまな読み方」が置かれています。

これをもとにして『異邦人』について一冊の本を書くことになり、2002年『カミュ「異邦人」を読む——その魅力と批評』を彩流社から上梓しました。「あとがき」では、まず初めに、フランスで出版した本について触れています。

思えばこれは実に恵まれた書物だった。指導教授や編集者との幸福な出会いがあった。そして、何よりも、私は自分のもっている最良のものをこの書物のなかに注ぎ込むことができたような気がしていた。もう二度とこのようなものは書けないだろう。長いあいだ、そんな思いにとらわれてきた。このフランスでの出版のあと、私は日本語（およびフランス語）で規則的に論文を書き続けてきたが、それらを集めて一冊の本を作る勇気はなかった。

他方で、『異邦人』についてだけは、自分の研究をまとめておきたいという願いもあった。どういうスタイルで書くのか、さまざまに迷ったあげく、1999年末から執筆を始め、2001年晩春、奈良へ転居する前に書き終えた。『異邦人』について書くべきことはすべて書いたという思いだった。これは書物として出版するしかない、と私は思った。

どのような構成で書くのかについては、ずいぶん時間をかけて考えました。ひとつのやり方は、批評方法の紹介であった『『異邦人』のさまざまな読み方』を発展させることです。しかし、これだと、『異邦人』の物語の展開を追うことができません。いろいろ試みたあと、最終的には二つの部分に大きく分けて、言語学の用語を借用して各部、各章の見出しを付けました。物語というものが時間軸にそって換喩的に展開されるものである以上、まず物語の冒頭から結末へと順を追って読み進むことにし、この前半部分にローマ数字のⅠを付けて「通時的に読む」としました。次に後半部分ではテキスト全体を空間的にとらえて分析の対象とし、Ⅱ「共時的に読む」と標題をつけました。さらに、そこにおいては、物語が「いかに語られているか」と「何が語られているか」をひとまず分離して考察を進め、第一部「言表行為を読む」と第二部「言表を読む」に分けています。

『カミュ『異邦人』を読む』の原稿を仕上げたあと、日本学術振興会からの派遣研究員として、2002年4月から半年間パリに滞在する機会を得ました。カミュの8歳年少の友人であった作家のロジェ・グルニエさんの知己を得たのもこのときです。爾来、パリへ行くたびにガリマール社にグルニエさんを訪ね、またバック通りにあるグルニエ宅に昼食やお茶に招かれたのも再三再四でした。グルニエさんの好意にこちらが甘えているだけという感じなのですが、貴重な話をいろいろ聞かせていただきました。このグルニエ会見記については『流域』にいくつか発表しましたので、そちらに譲ります。

第4章 『ペスト』とフクシマ

2011年3月11日の震災のとき、私は奈良女子大学文学部長の職にありました。4月のある日、部長室での会議のあと、数人で語らっているときに生まれた試みが「東日本大震災ウィーク in 奈良女子大学文学部 授業の中で〈震災〉を考える」です。6月6日（月）から10日（金）の一週間を「震災ウィーク」と定め、この週に実施される授業において、それぞれの枠内で、それぞれのやり方によって〈震災〉をテーマに取り上げることにしたのです。

幸いにして大きな反響を得た「震災ウィーク」の終了後、私たちはこの企画をとりまとめて、ブックレットのような形で残せないかと模索を始めました。やがてそのアイデアは発展して、「奈良女子大学文学部〈まほろば〉叢書」の設立へといたり、その第1冊目として2012年3月『大学の現場で震災を考える——文学部の試み』（かもがわ出版）を刊行しました。

私自身が立場上この企画を主導することになり、授業でも震災を取り上げました。毎年私が担当しているフランス文学史の講義では、ルソーとヴォルテールを講ずるときにいつも、1855年リスボン大地震における両者の論争を紹介してきました。それまではこれに関して阪神淡路大地震の話をしていたのですが、この年は東日本大震災に触れました。この講義をもとにして書いたのが、「震災とフランス文学」と題した文章です。その冒頭部分を引用します。

人間の不幸に対して、これまで文学がなしたことは、言語による表象とその解釈の作業を通じて、この不幸の理解の次元を深めること、ただそれだけだった。不幸をなくすことはもちろん、それを減ずることも、文学にはできない。激励や慰安を与えることさえできるかどうか、かなりあやしいと思う。しかし、これまで人類を襲ったかすかすの不幸について、人々が何を考え、どのように対処してきたのか、そうした思考と振る舞いについての理解を深めること、それだけは文学にできることだろう。

このあと、カミュ『ペスト』、そして『星の王子さま』公式ホームページに掲載されたフランスからのメッセージとそれに対する私の返信、最後にリスボン大地震に関するヴォルテールとルソーの論争へと続きます。ここでは、『ペスト』についてだけご紹介します。

2011年3月11日、地震発生するとき、フランスは午前6時46分でした。それから8時間後、フランスから最初のメールが届きました。国際カミュ学会会長アニェス・スピケルさんからの安否の問いあわせでした。これを皮切りとして、欧米各国にいる理事会のメンバーから発信されたメールが次々と受信トレイに飛び込んできました。だれもが日本支部の会員の身を案じていました。仙台在住の一人の会員とだけ連絡が取れませんでした、その他全国に散在する会員が無事であることを確認したあと、私は理事会宛てにメールを送りました。

震災直後、私の頭に浮かんだのは、カミュが小説『ペスト』において描いた伝染病との闘いでした。理事会宛てにメールを送ったとき、私はこの非常時にあって『ペスト』のなかの一節を思い出すと書き添えました。けれども、震災直後にカミュの『ペスト』のことを考えた人は、他にも大勢いたのです。幾人かのジャーナリスト、作家、知識人は、自分の文章のなかでカミュのこの小説を引用しました。インターネット上では、多くの人たちが自分のブログで『ペスト』について語りました。人々はこの小説を渴望するように読み、あるいは読み返し、カミュのメッセージが日本の現状において真のリアリティをもっていることを発見したのです。

「震災とフランス文学」に書いたこの『ペスト』に関する内容をさらに発展させたのが、*« La Peste à Fukushima »* と題した一文です。これは、2013年カミュ生誕100周年を記念して *Philosophie Magazine* のカミュ特集号が刊行されたとき、寄稿を求められて書いたものです。この文章はフランスでは驚きを持って迎えられました。

また同年に出た *L'Herne Camus* (Les Cahiers de L'Herne) から原稿依頼がありました。フランスを中心に世界中のカミュ研究者が執筆していますが、私への注文はカミュの小説作品について一般読者向けの文章を書けと言うものでした。ためらわず、東日本大震災から『ペスト』を読み直すという視点で、*« La Peste, la force de l'allégorie »* を書きました。冒頭近い文を引用します。

カミュの小説では、ペストはたんに疫病でも、ナチズムの置き換えでもない。その射程はずっと長くて広い。アレゴリーとは抽象的な概念を具体的な形を借りて暗示する表現法であるが、カミュはその手法を用いて、ペストによって人類に襲いかかるあらゆる不条理な悪意

を表象したのだ。

このあと本論では、『ペスト』の分析を通して、この小説におけるペストがたんなる病菌ではなく、もっと広い射程で描かれていることを述べています。そして最後に、1955年、バルトによる『ペスト』の分析と、それに対するカミュの回答について触れました。バルトは「歴史の意識から生まれた作品が、しかしながら歴史のなかに明証性を探し求めるのではなく、明晰性の方向をモラルのほうへと向けることを選んだ」と、批判したのですが、それについてカミュはどのように答えました。

私は『ペスト』がいくつかの次元において読まれることを望んだが、しかしそれはナチズムに対するヨーロッパのレジスタンスの闘いを明白な内容としている。その証拠には、ここで名付けられていない敵は、ヨーロッパのすべての国において、だれもがその正体を認めたということだ。

このカミュの回答については、それが書かれた時代を考慮する必要があります。『反抗的人間』をめぐる論争において、サルトルはカミュが「歴史を拒否した」と批判しました。その3年後に書かれたバルトへの反論において、カミュは自分の小説がヨーロッパの歴史的体験に根ざしている事実を強調しています。しかし今日、ヨーロッパから遠く離れて、私たちは、つぎのようにカミュが理論を逆向きに提示できたのではないかと考えることはゆるされるだろうと、私は自分の論文を結びました。

『ペスト』は、ナチズムに対するヨーロッパのレジスタンスの闘いを明白な内容としているが、私はそれがいくつかの次元において読まれることを望んだのだ。この小説はたんに疫病の物語でも、レジスタンスの物語でもない。そうではなく、災禍、不正、暴力の物語であり、いつの時代にあっても私たちの惑星のいたるところで人類を襲うあらゆる不条理な悪意との戦いの物語なのだ。

2013年、カミュ生誕100年を記念して、フランスではカミュ関連の書物が大量に出版されました。いまご紹介した *Philosophie Magazine* や *L'Herne Camus* などの大型本がバリの書店に山積みされていました。この生誕100年は日本ではあまり話題になりませんでしたが、それでも、いくつかの新聞が取り上げてくれました。まず2月初めに『日本経済新聞』の記者から電話がありました。時間があれば奈良まで行きますとのことでしたが、結局は電話とメールによる取材を受けただけで、記者が書いた文章が文化欄に掲載されました。「カミュが放つ新たな光」「哲学者の側面に注目」「震災後小説『ペスト』に脚光」などの見出しが付けられていますが、すべて私が語ったことです。7月には『朝日新聞』の記者が東京からやってきました。カミュは若い頃好きだったんですという彼は、文庫本をいっぱい抱えて研究室に入ってきました。とても熱意ある

その質問に答えながら、3時間ぶっ通しでカミュについて語りました。その後も電話とメールによるひんぱんなやりとりがありました。最終的には記者が文章をまとめましたが、ほとんど共著と言ってよいものです。11月には共同通信から原稿の依頼が来て、これは共同通信の配信で全国の地方紙に掲載されました。その最終部分を引用します。

今日、日本では、カミュの名前は若い人たちにはなじみが薄い。だが、フランスでは、1960年の早すぎる死以後も、カミュはつねに、それぞれの時代の課題との関わりにおいて読み続けられてきた。

1989年ベルリンの壁の崩壊は、評論『反抗的人間』などで左翼全体主義を批判したカミュの立場の正しさを立証した。1990年代から続いたアルジェリアのテロは、戯曲『正義のひとびと』などでテロリズムについての考察を続けたカミュを再発見する機会を与えた。

死後50周年の2010年には、フランスのマスコミはこぞってカミュをとりあげた。そして生誕100年を迎えて、今日、フランスにおいては、あらゆる分野からカミュ再評価のさなる声があがっている。

第5章 『カミュを読む——評伝と全作品』

2010年、『星の王子さま事典』を大修館書店から上梓したとき、担当編集者から次はカミュの本を出しませんかと提案を受けました。ちょうど2013年がカミュ生誕100年でしたので、誕生日の11月7日に刊行と定めて、準備に取りかかりました。文学部長の3年間でもありましたが、部長室にプレイヤード版全集を持ち込んで、公務の合間を縫って執筆しました。これまでカミュについて書いた文章のすべてをもう一度大きな鍋のなかに入れて、煮立てて、エッセンスだけを掬いあげようと思いました。それでも400頁の本になりました。

『カミュを読む——評伝と全作品』の表題が示すように、カミュの生涯を紹介しながら年代順に作品解説をするというごくふつうの構成です。学術書ではなく一般読者向けであり、いっさい注はつけていません。2013年8月には初校の点検を終えましたが、出版者側の事情で11月刊行には間に合いませんでした。2014年2月には再校も終えましたが、編集者の身辺事情もあって、刊行がさらに延びました。2015年4月表紙デザインができあがり、奥付けの校正が終わり、価格も決定しましたが、今度は著作権問題で調整が必要となりました。この『仏文研究』が刊行されるときには、たぶん目の目を見ているだろうとは思いますが。

カミュの生涯を通じての文学的営為は、人間を襲う暴力的なるものとの闘いであったという観点から書きました。これは、2013年から2017年までの私の科研費の課題「アルベール・カミュ研究——「暴力」に抗する文学と思想」と同じ主題設定でもあります。この本の「まえがき」から一部分を引用します。

カミュにとって人間を襲う暴力的なるものとは、病気、死、災禍、戦争、テロ、殺人、全体主義であった。それに対して、彼は一貫してキリスト教や左翼革命思想のような上位審級を拒否し、超越的価値に依存することなく、人間の地平にとどまって生の意味を探しとめた。彼は「父」としての神も、その代理人としての歴史も拒否した。

「不条理」の系列の作品の主題は、「父＝神」を否定し、生の意味の失われた時代にあって、死の定めのもとにある人間の姿を描くことだった。「反抗」の系列の作品の主題は、「父＝歴史」の名のもとになされる政治的殺人の拒否だった。「父」の名によって人間の不条理な死や殺人が正当化されるとすれば、その父を否定した上で、どのようにして幸福と潔白を維持できるのか、それが彼にとっての課題であったといえる。

こうしたカミュにとっては、世界の美の記憶がよりどころだった。若き日の彼は、『裏と表』において「ぼくの王国のすべてはこの世界にある」と書き、また『結婚』では「世界は美しい。そしてこの外には救いはない」と宣言した。地中海の自然は、彼に世界の美しさを、あらゆる経験と理論に先立つ不壊の原理として教えたのだ。

この美に対して、彼は生涯を通じて忠実だった。カミュはまた、「ぼくは超人的な幸福はないし、一日一日が描く曲線の外に永遠はない、ということを学んだ」とも書いている。今このとき、この一日、それが彼にとってすべてだった。「ここ」より他の場所「いま」より他の時間を拒否し、超越性なき世界を生きる叡智と歓喜を追求するという姿勢が、カミュの作品のすべてを貫いている。

この書物では、カミュの著作を「ルイ・ランジャール」から遺作となった『最初の人間』まで順を追って紹介しています。カミュは、1960年自動車事故で46歳の短い生涯を終えました。その墓は、南仏の小邑ルールマランにあります。パリを嫌い、アルジェリアに近い南仏に別荘を持ちたいと長いあいだ願っていた彼は、1958年9月になって、ルールマランにようやく別荘を購入しますが、わずか1年半後に亡くなりました。この家には今も娘のカトリーヌさんが住んでいます。

ルールマランはこれまで4回訪れました。かつてはエクサン＝プロヴァンスから路線バスの便がありましたが、それが廃止されてからは車で行くしか方法がありません。自分で運転しない私は、人の車に乗せてもらって行きました。本年9月には、カトリーヌ・カミュさんに招かれており、5度目の訪問となります。

とりわけ印象深かった1997年の2回目の訪問については、雑誌『ふらんす』（白水社）の1997年12月号に書きましたので、それを紹介して本日の講演を終えたいと思います。その年の8月、トゥールーズ大学教授で、私の博士論文の審査委員でもあったジャン・サロッキさんを、彼の別荘のあるサン・レミ・ド・プロヴァンスにたずねました。滞在2日目に、こちらは予期していなかったのですが、彼はルールマランまで車で連れて行ってやると言いました。たしかにルールマランは車で50分ほどのところですが、私としては墓参だけのつもりでしたが、彼は車中でカトリーヌの家をノックしてくればよい、自分は行かないので一人で行けと言いました。カミュ研究で国

家博士論文を書いた彼ですが、わけあって、カミュ家と仲違いしていたのです。ということで、一人で行くことにしました。ただ、その頃カトリーヌさんはあまり人前に出ず、来客を受け入れないとの話を聞いていました。以下、本日最後の引用です。

ルールマランに着いて、墓地を訪れたあと、私は「カミュ通り」へ向かった。「たずねていてもカトリーヌは会わないだろう」と、近くのカフェでは言われた。しかし家の前で、買い物から帰ってきた彼女にばったり出会ってしまった。彼女が出演したフランスのテレビ番組を二つ見たことがあったので、その顔には見覚えがあった。私が名前を告げると、「あなたの本は知っています」とだけ答え、次に「昼食前なので、少しの間だけ」と言って、私を居間に通してくれた。彼女が飲み物を準備してくれているあいだ、ひとり居間に残された私は、その部屋を見回した。いかにも乱雑だった。訪問客を通すことなどまったく予期していず、ただ家族のくつろげる場所でありさえすれば良い、という考えなのがよくわかった。

「……」居間の横にはテラスがあり、光の条がよろい戸のすきまからさしこんでいた。やがて彼女は、「テラスに出てみますか」と言って、その戸を押し開き、私を招いた。大きな眺望が広がり、私は深く呼吸をした。夏の陽光の中、右手にルールマランの小さな城が見え、レタンの草原とオリーブ林が正面に展開し、遠くにデュランス川の流域が広がっている。カミュの作品の主人公たちがテラスからの眺めを好んだように、作家自身もまた、このテラスに立ちあるいは椅子に腰掛けて、さえぎるもののないこの草原の彼方へと視線を投じていたに違いない。